

文化が幾重にも堆積する京都のまちで「美術館活動」

京都中央信用金庫 常務理事・広報部 部長 かわかつ てつお 川勝 哲夫

1. 企業町衆として地域に生きる

当金庫は、京都を中心に大阪、滋賀、奈良に128の店舗を擁しています。とはいえ、私たち信用金庫は、全国規模で営業を展開する都市銀行等とは違い、中小企業・個人を中心とした会員の相互扶助を基本理念とした非営利法人であり、営業地域を定め、地域を基盤とする金融機関。したがって、信用金庫は地域の繁栄なくして自庫の発展は望めない、「地域と共に生きる」という大きな命題を背負っているといえます。そういう意味で、信用金庫の存在自体が金融機関業務を通じた地域貢献といえるのではないかと、肝に銘じながら活動を続けています。

と同時に、信用金庫の多くは、決して一つひとつの規模は大きくはないですが、それぞれの地域に合ったじつに多様な「グローバル」な活動を行っており、それらは多額を投じた大企業のメセナ活動に比しても遜色のない活動であり、それは信用金庫として自負に値するものだと考えています。

当金庫は「社会貢献」を「社是」に「社会的公共機関として地域社会の発展に寄与すること」と第一にうたい、「経営理念」にあげ、役職員一人ひとりに机上の理念ではなく「行動理念」として浸透させています。私たちは常々企業市民であると同時に企業町衆でありたいと思っています。



(川勝さん)



(中信美術館正面)

II. 預金量 1 兆円を記念して設立した 美術財団が果たした役割

先ほども申したように、当金庫は地域の人材育成、地域文化の振興、社会福祉活動、中小企業支援など、さまざまな地域貢献活動を行っています。

その 1 つである中信美術奨励基金は、預金量 1 兆円達成を記念して、昭和 62 (1987) 年 4 月に京都中央信用金庫を設立母体として発足しました。

これは、「京都府下における美術の創作活動を奨励し、伝統的文化の継承発展、ならびに京都府市民の精神文化向上に寄与すること」を目的とした基金であり、設立以来今日まで 24 年間、経済状況の如何にかかわらず、一貫して地域の美術文化の向上のための活動を続けてきました。

おかげさまで、この財団は今年 4 月 1 日より公益財団法人に移行、より公益性の高い活動を目指して新たなスタートをきったところです。

とくに中心的事業である「京都美術文化賞」は、美術の創作活動を通じて京都府市民の精神文化向上に多大の功績のあった芸術家を顕彰するもので、毎年 3 名の芸術家に賞牌と副賞として 200 万円を贈呈しており、受賞の翌年には受賞記念展も開催。第 24 回目の今年で 72 名の芸術家を顕彰しました。



(展覧会初日には多くのマスコミが取材に来られる)

この賞の意義は、2 つあると考えています。

1 つ目は、同じ視点で 20 年以上、芸術家を顕彰し続けてきた結果、「京都の優れた芸術が京都美術文化賞に集まり、京都の美術界に一つの流れを残した」ことです。

2 つ目は、受賞した芸術家たちのその後の活躍にあります。第 1 回から選考委員を務めていただいている梅原猛氏も、「京都美術文化賞の創設は京都中央信用金庫らしい。一見地味ではありますが、大変誠実で有益な企画であったことは、第 1 回の受賞者として、後に文化勲章を受章された日本画家の秋野不矩氏が選ばれたことによっても分かる。この賞の存在は、伝統ある京都の芸術を発展させ、今後も京都からすばらしい芸術家を誕生させる刺激になっていることはまちがいない」と評価してくださっています。

企業のメセナ活動はバブル期には高価な作品購入、美術館開設、美術賞創設など華やかな活動が話題を呼びましたが、経済環境に左右されやすく、規模を縮小したり消滅したりしているのが現状です。そのような中、京都美術文化賞の贈呈は芸術界に一石を投じた活動であり、京都の芸術界や芸術家にとって意味のある賞であるといえるのです。



(作品は学生たちの研究対象)

Ⅲ. 気軽に美術鑑賞する機会を提供 ギャラリーから「中信美術館」へ

中信美術奨励基金のもう一つの活動の柱は、地域の方々に気軽に美術鑑賞の機会を提供する「美術館活動」にあります。

平成 13（2001）年 3 月に京都市役所前中信御池ビル 2 階に「中信御池ギャラリー」を設け、京都府市民の方々に気軽に美術作品を楽しんでいただいていたのですが、この活動を一歩進めるために、平成 21 年 2 月に京都府庁正門西 100 メートルのところ「中信美術館」を設置しました。

開館以来、「石本正展」「三浦景生展—京・染陶暦程—」「梅原猛と 10 人の仲間たち」「友禅 羽田登喜男の世界」等独自の企画展を開催し、上質で「ほんまもんの芸術」が味わえる美術館として人気を集めています。もちろん、入館料は無料であり、会期中、月曜の休館日以外は土曜・日曜・祝日も開館しています。

この美術館は展示品もさることながら、南欧風の建物も特色の一つといえます。



（市民の美術ボランティアも活躍）

丸みを帯びたライト・フレッシュ（うすい橙色）の壁面、屋根は銅版葺の瀟洒な南欧風の外観を持つ洋館が、古いたたずまいが残る京都の町並みに溶け込むように建っています。

渦巻きの連鎖をモチーフにデザインされた門扉、中庭にいたる花や虫を配したアール・ヌーヴォー風のイタリア製の鉄扉、地中海地方の遺跡を思わせる中庭の列柱、大理石の階段、大理石の粉を塗りこめたイタリア漆喰の白壁など贅沢な内装も味わい深く、建物を見に来られる建築ファンも多くあります。

Ⅳ. 美術館の第 2 のスタッフ 年間 519 名の美術館ボランティアが活動

中信美術館には、京都市教育委員会が市民の生涯学習の一環として平成 11 年から育成している「美術館ボランティア」200 名のうち、60 名が当館に登録してくださっており、年間延べ 519 名が美術館ボランティアとして会場巡視ならびに解説補佐として活動していただいています。

このボランティアの皆さんは、芸術文化が大好きな主婦や定年退職された男性などで、観客からの質問対応、次回展などの PR など熱心に活動していただいています。

とくに、長い人生経験からくる人への温かい眼差しは、観客への思いやりやさりげない気配りとなって現れ、当美術館のファン拡大に寄与しています。

また、この方々は比較的年齢層が高く、いわゆる年金受給口座を当金庫でお持ちいただいているお客様でも多く、本体の京都中央信用金庫も支えてくださるお客様であると共に、美術館を支えてくださる大切なスタッフの一員であるといえるのです。

V. 府庁界限 まちかどミュージアムに

中信美術館は、京都御所、京都府庁、樂美術館等が散在する豊かな文化土壌を要する地域にあります。

平安時代、この辺りは大内裏の東に位置し、藤原氏をはじめとする貴族の高級邸宅地であり、南北朝時代には、現在の京都御所に皇居が定着し、周辺には公家達が住んでいました。

豊臣秀吉の時代になると聚楽第が造られ、武家屋敷が軒を連ね、幕末には京都守護職の上屋敷が造られ、その跡地を引き継いだのが京都府庁。つまり、いつの世も朝廷に関わる人たちや文化人が住み、京都の文化を守り、支え、伝えてきた、歴史と伝統の蓄積した界限といえるのです。

昨年より、京都府庁を中心として周辺の約 20 の美術館・施設と連携し、それぞれの文化施設が連携し、「点」と「点」を結び「面」としての文化ゾーン「府庁界限まちかどミュージアム」構想の中心的施設として活動しています。

現在、瀬戸内海の直島や三河の佐久島、越後の妻有など過疎地において現代アートで「村おこし」「町おこし」をする活動が盛んに行われ人気スポットとなっています。

京都には東京遷都後、衰退した京都を立て直そうと開催された内国勸業博覧会敷地跡に建てられた国公立の美術館や音楽ホール、図書館が並ぶ岡崎文化ゾーンがあります。何十年か後、この平安時代から堆積する文化を継承する地域・府庁界限を岡崎と並ぶ文化ゾーンに京都府庁、地域の施設とともに育てていきたいと思えます。

そして、将来的には京都の町全体が一つの美術館となるような活動につなげていきたい。それこそが地域金融機関としての地域文化貢献ではないだろうか、と夢を広げています。

京都府庁から 京都中央信用金庫へ

京都府 文化環境部 芸術室長
藤井 貢さん

中信美術館は、京都府庁正門から徒歩 1 分というご近所で、質の高い美術品の展示を通じて地域住民はもとより観光客など多くの方々に京都の文化芸術の素晴らしさを伝えていただいています。

京都府では、府庁の旧本館（重要文化財）を活用し府庁周辺の由緒ある寺社や企業の資料館・美術館、文化観光施設と連携して、地域の文化活動を活性化していこうとする「府庁界限まちかどミュージアム」を平成 21 年 10 月から実施していますが、中信美術館では、1 回目から積極的に参加され、「文化芸術のまち京都」の発信に協力いただいています。

今秋は、日本最大の文化祭典である「国民文化祭」が京都で開催されますが、東日本大震災という未曾有の困難に直面する中で、復興に向け心を一つに危機を乗り越えることを呼びかけ、文化の力で日本を元気にしていくという重大な意義を持つものになります。

全国から文化芸術に親しむ多くの方々をお迎えするため、地域の絆をさらに深め文化の力で日本を元気にしていきたいと願っております。



ボランティアの声

中信美術館の良さは、公共の美術館のように大きくもなく、町のギャラリーのように小さくもなく、展示作品は 20 点程度で人間サイズであり適当。それでいて、企画趣旨は明確で、展示作品も一流で見ごたえがある「ほんまもん」が並んでいる点だと思います。

この美術館には、日本人が好きな印象派や海外の有名な作家の作品は並んでいません。一見地味でも味わい深い絵画や立体、京都ならではの作家の工芸作品も多いのが特徴です。美術館の前身、中信御池ギャラリー時代からボランティアをしています、その発想は一貫して変わりません。

地下鉄に乗ると、いつもドア横に展覧会のポスターが掲示されているのを目にするし、地元紙にも広告として掲載されている。それは、本体の京都中央信用金庫の文化芸術に対する理解と絶大な協力があるのだと感心しています。

お客様から、「いい作品が並んでいますね」「また、来ます」と声をかけられることも多く、口コミで来てくださるお客様も増え、ボランティアスタッフとして喜んでいます。(ボランティア N 氏)

◆ 信用金庫発の地域活性化情報をお寄せください！ ◆

発刊：社団法人全国信用金庫協会 協働事業部 地域活性化推進室

〒103-0028 東京都中央区八重洲 1-3-7

TEL：03-3517-5758/FAX：03-3517-5774

グローバルとは？

グローバルとは、「グローバル」と「ローカル」という二つの言葉を組み合わせた造語です。“Think globally, act locally.”—「地球規模で考えながら、自分の地域で活動しよう」、または「地球規模で考えながら、足もとから着実に行動しよう」という意味が込められています。

広い視野から地域を考え、できることから一つ一つ着実に地域密着で取り組んでいる信用金庫の地域活性化の姿を発信していきたいという願いを込めて、本誌のタイトルを「しんきんグローバル」としました。